

アメリカ黒人の不可視性をめぐって

——ラルフ・エリソン論のための覚え書き——

斎藤 忠利

学問というものが抽象化の作業であることから、人間を研究の対象としながら人間そのものを捨象した学問が横行する、という奇妙な事態が起こりかねないように、アメリカ黒人がアメリカ社会を構成する人種グループ (“an ethnic group”) として社会学その他の学問の研究対象に選ばれたり、この人種グループの存在がアメリカの社会問題として対症療法的に取りあげられるにつれて、人種グループとしてのアメリカ黒人の姿が一般化し、固定化するその一方で、個々のアメリカ黒人の具体的な姿が見えなくなる、という事態が生じてきている。⁽¹⁾このような奇妙な状況を、現代人の疎外状況ないしは人間の実存的なあり方に通ずる普遍的な問題として描いてみせ

た小説作品が、ラルフ・エリソンの代表作『見えない人間』(Ralph Ellison, *Invisible Man*) (一九五二年) であった。

私見によれば、『見えない人間』における基本的な問題点の一つは、人間の自由の問題であるが、エリソンはアメリカ黒人を最も実存的なあり方において生きている人間存在と考へ、アメリカ黒人がきびしい人種差別の犠牲者であることを認めながらも、それにも拘らず、アメリカ黒人は実存的な存在として、いわば可能性の塊りであると見ているふしがある。そこには、人間の自由というものに対するエリソンの極めてユニークな見解と立場がうかがわれるのであるが、この小論は、エリソンのい

うアメリカ黒人の不可視性が、アメリカ黒人がアメリカ社会における白人優位の原則の被害者であったという歴史的状况の結果であるに留まらず、アメリカ黒人の実存的なあり方、ひいては人間存在の可能性を示唆するものとして捉え直されて行く経緯を明らかにし、ラルフ・エリソン論のための足場を築こうとするものである。

* * * * *

ラルフ・エリソンは、前述の長編小説『見えない人間』と評論集『影と行為』(Shadow and Act) (一九六四年)の二冊だけで知られていると言ってよい寡作の黒人作家であるが、『影と行為』が出るまでは、その生い立ちなどに関して不明な点が多かった。『影と行為』は、十三頁にわたる「序文」を巻頭に掲げ、そのあと、社会的評論的な論文、ジャズ論、文学論などが三部にわけられて納められており、それらの評論をつなぎ合わせて見ると、おぼろげながらエリソンの人となりや、エリソンの思想を形成する上に与って力のあった様々な影響力を跡づけることができる。

そのところを、『アメリカの黒人小説』(The Negro

Novel in America) (一九六五年)の著者ロバート・ボーン (Robert Bone) が要領よくまとめてくれているので、その記述に従って以下に紹介してみると、エリソン⁽²⁾は、一九一四年にオクラホマ州のオクラホマ・シティに生まれ、早い頃から古典音楽に親しみ、八歳のときからトランペットの演奏にうち込み、また高等学校では和声学を修めている。その一方、オクラホマ・シティは、キヤンザス・シティやダラスとならんでサウスウエスタン・ジャズの中心地でもあったので、ジャズの強烈なビートに心をゆさぶられることにもなった。

エリソンは、一九三三年に作曲を学ぶ目的でタスキギー学院 (Tuskegee Institute) に入学するが、二年生のときに T・S・エリオットの代表的な長詩『荒地』(T. S. Eliot, The Waste Land) (一九二二年) を読んで文学を志すに至り、アメリカ小説——とくに十九世紀の作品——を幅広く読むようになった。一九三六年にニューヨークに出たエリソンは、先輩格の黒人作家リチャード・ライト (Richard Wright) (一九〇八年——一九六〇年) に会い——ライトは、一九三八年に、人種差別に抗議する最初の短篇集『アンクル・トムの子供たち』

(23) アメリカ黒人の不可視性をめぐって

(*Uncle Tom's Children*) を出版する——ライトから文
学上の手ほどきを受ける一方、ライトを通じて共産党に
接近する。エリソンが、ドストエフスキの作品に親し
んだのも、この頃であり、また、スペイン内乱時の政府
軍のための資金集めの会合に、ライトのお供をして出か
けた折には、アンドレ・マルローと会っている。

こうしてエリソンは、現代文学の高度の技法をわがも
のにすることによって、アメリカ黒人としての体験を定
着してみせることを、自らの作家としての使命とするに
至るのであるが、ライトによって代表される性急な抗議
小説と訣別した『見えない人間』は、そのようなエリソ
ンの努力の見事な結実であった。

エリソンが『見えない人間』の中で、アメリカ黒人の
体験をアメリカ黒人の正体の喪失過程として描きながら、
その過程をアメリカ黒人の自由の可能性を暗示するもの
として捉え直すことができたのは、一つには、エリソン
がオクラホマ州生まれの黒人であったこと、また一つに
は、ジャズの世界に通曉していたことが大いに関係して
いると思われる。というのも、オクラホマ州は、エリソ
ンが生まれる七年前に合衆国の一州として昇格したばか

りで、新開地の趣きがあり、フロンティア的な要素が多
分に残っていた。そこで、その当時のオクラホマ州にお
ける人種関係は、いまだ固定化しておらず、どちらかと
言えば流動的で、そこに生まれた黒人に自由な想像力が
働く余地を残してくれていたのである。そのところを
エリソンは、こう書いている——

一つのことは確かだ——わたしたちの地域社会は、混
沌とした社会で、いまだにフロンティアの人生態度や、
ナイーヴなものと世間ずれしたもの、温和なものと悪辣
なものとの奇妙な混淆——それが、アメリカの過去をあ
れほど不可解なものにし、またアメリカの現在をこんな
にも紛らわしいものにしていくのだが——を、その特徴
としていた。そのような混淆が見られる場合には、しば
しば、こうした辺境に育つ若者たちの精神は極めて幅の
広い、型にはまらない自由を持つことが許され、また、
それに力づけられて個人の想像力は——「現実」の壁が
立ちふさがるその瞬間まで——涉猟を続け、ときには天
翔ることもあるのだ。⁽³⁾

ジャズについては、エリソンがジャズを「矛盾を内にはらんだ芸術形式」と見ていること、また「真のジャズとは、グループの内部に留まりながら、同時にグループにさからって個人としての自己を主張する芸術である」(“……true jazz is an art of individual assertion within and against the group.”)と書づけていることに注目したい。^(*)ジャズの生命は、その即興性にあると言われるが、その即興性は、あくまでも伝統的な素材をふまえた即興性であって、ジャズマンは自らの個性を発揮しつつ、その個性を全体の音楽の中に消して行かなければならないことになる。このように、個性を発揮することが個性を消すことであり、個性を消すことが個性を発揮することである、というようなジャズの逆説的な状況に触発されて「ジャズマン」のエリソンが、アメリカ社会におけるマイノリティとしてのアメリカ黒人の位置づけと、その自由の可能性を考えようとしていることは明らかであって、そのような発想は、アメリカ黒人が「見えなくなっていく」過程を描いた『見えない人間』にも引きつがれている。

ところで、「矛盾」とか「逆説」と言えば、アメリカ

黒人は歴史的に、アメリカ社会の「矛盾」ないしは「逆説」をその身に負わされてきた人間である。その「矛盾」ないしは「逆説」とは、端的に言えば、人間の平等を国是としたアメリカが、奴隷制度をかかえたまま建国したという事実由来するのであるが、このような理念と現実の乖離、いわば「名」と「実」との間のずれ——エリソンの評論集の題名をもじって言えば、「影」と「行為」の非整合性——が、アメリカ人の原罪として、アメリカ人に精神的な緊張を強いる結果となり、それがひいてはアメリカ人の芸術的な想像力の発条ともなっているのである。「この問題をアメリカ小説の歴史の上で検証してみようとすれば、たとえばマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』(Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn*) (一八八四、八五年)が、まず想起されるが、浮浪児ハック(白人少年)が黒人奴隷ジムと筏の上で共通の運命に結ばれるという設定には、上述の「理念と現実の乖離」を克服しようとする姿勢と、アメリカ黒人の存在はアメリカの運命と不可分のものだとする認識がうかがわれる。」

なお、このような「名」と「実」との間のずれは、エ

(25) アメリカ黒人の不可視性をめぐって

リソン個人の問題でもあった。というのは、読書好きのエリソンの父親が、「コンコードの哲人」ラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson) (一八〇三年——一八八二年) にあやかって、息子のエリソンを「ラルフ・ウォルドー」と名付けたために、エリソンは子供の頃から自分の名に関して心おだやかではいらなかったからである。エリソンが幼年期を過ごした第一次世界大戦の前後の時期には、あの高名な思想家ラルフ・ウォルドー・エマソンの名前がオクラホマ州の黒人たちの間でも、かなりよく知られており、偉大な名前をもつエリソン少年は、黒人の大人たちから、その名前のこと
で揶揄・嘲笑の的にされてしまった。小学校に入学してからも、事態は相変わらずで、その当時のことをエリソンは、こう書いている——

わたしの小学校時代を通じて、その名前は相変わらず、わたしを悩まし続けた。というのも、その名前を聞くと、必ず他の人々の顔に、なにか謎めいた表情が浮かぶからだった。まるで、わたしが、なにか自分の眼や耳ではたしかめられない隠れた能力か、あるいは障害をもっている

人間みたいだった。サウス・カロライナ州に土地があるという具合に、自分のものではあっても、自分のものにはなっていないようなもの、自分のものではあっても、何年か先にならなければ自分のものにはできないものを、もっている人間みたいだった。⁽⁵⁾

やがてエリソンは長ずるに従い、学校の勉強としてエマソンについてなにかの知識を得る必要に迫られ、エマソンの詩『コンコード賛歌』(“Concord Hymn”) や論文『自恃』(“Self-Reliance”) を読みはしたが、エマソンから「自らを恃む」べきことを教えられて、自分のミドル・ネームの「ウォルドー(Waldo)」を頭文字の「W」だけにして、「名前」の呪縛からの脱出をはかり、それ以後はエマソンの著作を蛇蝎のごとく嫌って、自分から進んでエマソンの著作を読むことはなかった、という。(もちろん、このことは、のちになってエリソン自身も言うように、偉大な思想家エマソンに対する尊敬の念があつてのことであつて、長いこと「名前」の重荷に苦しんだエリソンは、その重荷に耐えつつ、エマソンがアメリカの文学者に期待した仕事の一端を担う義務は免

れないところだ、と述べている。⁽⁷⁾

ここには、エリソン個人の心理的な葛藤として、「名」と「実」との間の「ずれ」に対する苛立たしいまでのオブセッションがあり、アメリカ社会における「理念と現実の乖離」という矛盾を背負わされたアメリカ黒人の一人としてエリソンは、その矛盾をエリソン個人における「名」と「実」との「ずれ」という形で極めてパーソナルに、いわば二重の意味で引き受けざるを得なかったかの観がある。

このような「ずれ」ないしは「乖離」を克服する道は、言うまでもなく「実」を「名」にむかって収斂させることであり、「現実」を「理念」に合致させることだ、と簡単に結論づけられるであろう。ところが、困ったことに、「名」と言い、「理念」と言っても、それは所与のものとして、すでにあつたものであつて、それを非主体的に受け取らざるを得ないという状況のもとでは、その「名」や「理念」は、目ざすべき目標であるまえに、重荷であり呪縛である。

こうしてエリソンは、従来アメリカ黒人の「正体」とされてきたものが、実は、白人優位の原則が支配するアメリカ社会から押しつけられた「名」にはかならない、

とするユニークな認識に到達する。そこで、アメリカ黒人が自らの真の正体を見定めるためには、重荷でしかなかったその「名」をかなぐり捨てる必要であり、そうすることによってアメリカ黒人の主体性は確立され、アメリカ黒人の自由への展望は開けてくる、とするのである。

結論を先取りして言えば、『見えない人間』においてエリソンが見事にやってのけたことは、アメリカ黒人に押しつけられた「名」を排除して行くことによつて、正体をもたないことがアメリカ黒人の真の正体であること——アメリカ黒人が「見えない人間」であること——を発見したことであり、そのことを通じてアメリカ黒人の自由の可能性をさぐり当てたことであるが、ロバート・ポーンも言うように⁽⁸⁾、エリソンは『見えない人間』を執筆するにあたって、ドストエフスキの『地下室の日記』から多くのことを学んでいる。リチャード・ライトも、この作品からヒントを得て『地下にひそんだ男』⁽⁹⁾ (“The Man Who Lived Underground”) (一九四四年) という短篇を書いているが、エリソンは『地下室の手記』を『見えない人間』の下敷きとして使っており、『地

ら人間にとって何よりも有利なものかもしれない、とりわけ、ある種の場合にはそうなのかもしれないのだから。特殊な例をとるなら、たとえばそれが明白に害をもたらす、利益についてのぼくらの常識のもっとも健全な結論に反するような場合でさえ、やはりそれはあらゆる利益よりもさらに有利なのかもしれない、というのは、すくなくともそれが、ぼくらにとっていちばん大事で貴重なもの、つまり、ぼくらの個と個性とをぼくらに残しておいてくれるからである。(江川卓氏訳)

「恣欲」という言葉で説明されている、この人間の自由は、場合によっては、この上なく絶望的な人間にも自殺する自由だけは残されているといった類の自由であるかも知れないが、それにも拘らず、その自由は、人間が絶望の淵に沈みながら、なおそこに人間存在の最後のよりどころを求め、生きる活路を開いてくれるものとなり得るのではないか。

たしかに『見えない人間』においてエリソンは、人間の自由というものを、そのようなものと理解し、アメリカ黒人が真の正体をもたないことをアメリカ黒人の不幸

と見るだけに留まらず、正体をもたないことを、どのような正体をも選び取れることである、と捉え直して、実存的に生きるアメリカ黒人の可能性を模索しようとするのである。

それでは、その可能性は、アメリカ黒人がアメリカ社会のマイノリティであるという現実⁽¹¹⁾に即して考えてみると、どのような方向をとり得るであろうか。ここに至ってエリソンは、前述したようなジャズの芸術形式の逆説に学んで、黒人でありつつアメリカ人となる道を選ぼうとする。これは、アメリカが「多にして一」という逆説の国である以上、アメリカ人がアメリカ人になるためには避けがたい二律背反であって、アメリカ黒人は、この二律背反を最も深刻な形でその身に負っている、ということなのであろう。かつてウォルト・ホイットマン(Walt Whitman)(一八一九年——一八九二年)は、「自分自身」を歌いながら、「民衆とともに」、「大衆のなかで」と言いそえることができたが、アメリカ黒人解放運動の指導者W・E・B・デュボア(W. E. B. DuBois)(一八六八年——一九六三年)は、一九〇三年に次のように書いた——

(29) アメリカ黒人の不可視性をめぐって

……このアメリカの世界は、黒人に真の自己意識を与えず、他者の世界の啓示を通して自己を眺めることしか許さない世界なのだ。この二重の意識、たえず他者の眼を通して自己を見るときという感覚、軽蔑と憐憫を楽しみながら見物している世界の巻き尺で自己の魂をはかるという感覚——このような感覚は、奇異なものである。いつも自己の二重性を感じている——アメリカ人であって黒人であること。二つの魂、二つの思想、調停されずにいる二つの争い、一つの黒い肉体の中で戦い合う二つの理想——その肉体を破裂させないでいるのは、その肉体の頑強な体力だけなのだ。

アメリカ黒人の歴史は、このような争いの歴史——自己意識をもった人間になろうとする熱望、二重の自己を融合して、より良い、より真実な自己になろうとする熱望の歴史なのだ。このような融合を行なう際に、アメリカ黒人は、古い自己のいづれをも失いたくないと望んでいる。アメリカをアフリカ化しようとは思わない。というものは、アメリカは、世界とアフリカに教えることを、あまりにも多く所有しているからだ。アメリカ黒人は、

自らの黒人の魂を、白いアメリカニズムの洪水の中で漂白させようとは思っていない。黒人の血は、世界に伝えるべき使命をもっていることを知っているからだ。アメリカ黒人は、同じ人間からののしられたり、唾をかけられたりせず、その目の前で「機会」の扉が荒々しく閉ざされたりすることなく、一人の人間が黒人でありつつアメリカ人でありうるようにしたい、と望んでいるだけなのだ。⁽¹³⁾

ところが、『見えない人間』の主人公は、このような深刻な二律背反に居直って、人間の自己分裂が人間の健全さを保証する、と考えているふしがある。この主人公は、アメリカ南部出身の黒人で、高校時代から演説を得意とし、それが認められて奨学金を受け、黒人大学に進むが、白人の大学理事を黒人部落に案内したことから、黒人の学長の裏切り行為によって放校となり、ニューヨークのペンキ工場で働き、事故にあう。その事故で危く命拾いをしたのち、ニューヨークの黒人街で追い立て事件にまきこまれたことから、共産党を思わせる「兄弟団」という団体に関係するようになり、その団体内で頭

角をあらわすが、ある黒人団員が警官に射殺されたことに抗議するパレードを組織し、その団員の葬儀を計画したことで、これを「兄弟団」の規律を破るものと非難され、また「兄弟団」が黒人たちに冷淡になったこともあって「兄弟団」に失望し、折から起こった黒人街の人種暴動のさなか、本来たかうべき相手ではない過激な黒人民族主義者とその一味に追われて、マンホールに落ち込み、地下室暮らしを続けながら、「見えない人間」としての自己確認を行なうのであるが、その自己確認は、いわば度重なる幻滅の果てに行きついた、憂うつではあるが、なにか吹っ切れたようなところのある悟りの境地の趣きがある。

アメリカ黒人における自己分裂——二重人格性——は、アメリカ黒人がきびしいアメリカ社会の諸条件の中で生きのびるために、心ならずも身につけざるを得なかった面従腹背の生活態度に淵源するものであろうが、そこにすでに、「仮面」と「実体」との間に、ずれが生じていく契機がひそんでおり、「仮面」を「実体」と受け取られることによって、アメリカ黒人の「実体」が「仮面」のかけに見えなくなっていく危険があった。しかもその

「仮面」は、望ましい黒人像としてアメリカ社会が歓迎するものであっただけに、アメリカ社会にアメリカ黒人の「実体」として定着する可能性が大きかったと言えるであろう。

その一方、アメリカ黒人は、「白い」アメリカの「黒い」部分をその身に背負わされてきた。アメリカ黒人をめぐる数々の神話——一例をあげれば、アメリカ黒人の性的能力についての神話——は、アメリカ社会が「悪」とするものに対する白人種の羨望と恐れが、アメリカ黒人に投影されて作り出されたものであって、「白い」アメリカ人は、その「黒い」部分をアメリカ黒人に転嫁することによって、その「白さ」を確保しようとしてきたのである。その辺の事情を『見えない人間』に即して、具体的に検討してみると、たとえば第一章で主人公は、高校の卒業式に行なった演説が評判となり、翌日、町の白人の有力者たちの前で同じ演説をすることになったとき、その演説に先立って、白人たちの「慰み物」にされて、他の黒人たちと乱闘ボクシングをする破目になる。これは、黒人種の肉体的能力——暗に性的能力——に羨望と恐れを抱く白人種が、黒人種同志を戦わせることに

よってその肉体的能力を消耗させ、そのことを通じて黒人種の肉体的能力にあやかり、同時にその肉体的能力の脅威を解消しようとするのである。そこで、アメリカ黒人は、白人種が内心ひそかに望みながら社会的に抑圧されて実行できないことを、白人種にかわって演じさせられている、ということになるのであるが、第二章に語られているエピソードは、そのことを象徴的に示している。そのエピソードとは、主人公が大学の三年生になって、白人の大学理事を黒人部落に案内したときの話である。白人の大学理事は、その黒人部落で、自分の娘を妊娠させてしまった黒人の小作人に会い、ショックのあまり意識を失うほどの異常な関心を示すが、これは、はからずも彼自身の内部にも近親相姦的な衝動があったことを暴露している。つまり、アメリカ黒人は、たとえば人間の動物性を顕在化させる存在に仕立て上げられることによって、白人種の内部に潜在する人間としての動物性を隠蔽する役割を担わされていることになるのである。そのような意味で、アメリカ黒人は白人種の「仮面」となり、またしてもアメリカ黒人は、「名」と「実」との間のずれに苦しまざるを得なくなるのである。

つぎに、『見えない人間』のストーリーの展開として、黒人大学からの主人公の放校——ペンキ工場における爆発事故——「兄弟団」への入団という一連の出来事を考えてみると、その出来事が起こるたびに主人公は、新しい人間に生まれ変わって別人のごとく行動せざるを得ないような状況に追い込まれる。とくにペンキ工場での事故のあと、治療という名目で電気ショックの人体実験の材料として使用されたときは、自分の名前さえ思い出せなくなり、ここで主人公は、いわば死と再生を経験し、そのあと黒人街で倒れたとき介抱してくれた黒人女を新しい母親に見立ててさえいるかの観がある。さらに、「兄弟団」に入団する際には、新しい名前を貰っている。これは、アメリカ黒人の「正体」なるものが、歴史的に言って、さまざまな時代や状況の変化につれて人為的に作り出され、アメリカ黒人はその正体ならぬ「正体」を、自己の正体として受け取らざるを得なかった、という事実を象徴している。現にアメリカ黒人は、「五分の三」人前の人間であり、「アンクル・トム」⁽¹⁵⁾であり、「分離はすれど平等」⁽¹⁷⁾（“separate but equal”）とされる存在であった。

『見えない人間』の主人公は、次々に押しつけられる「正体」を、いわば受け取っては捨て、受け取っては捨て、最後に「兄弟団」に入団するのであるが、その「兄弟団」に幻滅して、マンホールに落ち込んだとき、兄弟団から与えられていた「正体」を捨てた自分の正体——正体をもたないという正体——を発見する。つまり、自分で名乗る「名」は誰にも聞いて貰えぬまま、いろいろな「名」で呼ばれてきて、最後の土壇場でその「名」を返上すると、「見えない人間」だった、というわけなのだ。⁽¹⁸⁾

「以上のことから明らかのように、アメリカ黒人の不可視性とは、アメリカ黒人が「白い」アメリカの価値基準によってしか自己を眺めることができない人間に仕立てられてきた、という痛ましい事実の象徴化であるが、その価値基準に幻滅したアメリカ黒人が、その価値基準をはなれて自己を眺め直そうとしたとき、自らすすんで実存的に存在が目的に先行するようない方で生きていく存在であることを発見し、そこに人間としての自由と可能性をさぐり得る、とされるのである。『見えない人間』の主人公は、自らの不可視性を凝視しなが

ら、このように述懐する——

……ぼくは、勤勉とか進歩とか行動とかの有効性を信じていたが、最初は体制「側」、つぎは「反」体制にまわりもしたので、今は、いずれの隊列にも組せず、なんらの限界も自分は課すこととはしないが、こういう態度は、たいへんに現代の傾向に反するものだ。だが、ぼくの世界は、無限の可能性をはらんだ世界になっている。これはまた、なんたる文句——だが、これは名文句だし、立派な人生観で、人間たるもの、それ以外の人生観など受け入れるべきではないのだ——それくらいのは、ぼくも地下暮らしをしていて学んでいる。どこかのギャングが、まんまと、この世界に拘束服を着せるまでは、この世界の定義は可能性ということなのだ。人々が現実と呼んでいるものの狭い境界線の外に足を踏み出してみると、混沌……もしくは想像の世界に足を踏み入れることになる。そのことも、ぼくが穴ぐらで暮らして学んだことだ。だからといって、ぼくの知覚は鈍ったわけではない——ぼくは見えない人間だが、盲目ではないのだ。⁽¹⁹⁾

(33) アメリカ黒人の不可視性をめぐって

それでは、その可能性は、どのような具体的な内容をもって現実化し、「名をもたない」アメリカ黒人は、どのような名を自ら選び取ろうとするのであろうか。『見えない人間』の主人公は、「見えない人間にも社会的に責任ある役割を果たす可能性がある」と言うだけで、それ以上は答えない。また、最後まで、その名を明かさなない。そこには、現実性が可能性の否定となり、名を選び取ることが自己限定に通ずるといふ逆説的な状況に対する、苦渋に満ちた認識があるのであろう。そうだとすれば、アメリカ黒人の不可視性は、人間存在の最も基本的な構造に深くかかわってくる問題だと言わなければならぬ。

なお、この問題は、アメリカ黒人をアメリカ文明の私生児——「名をもち得ない」日陰の存在と捉えるジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin) (一九九四年) に引きつがれる問題でもあるが、その点については他日を期した。

(1) Cf. 'The Negro's life in our white land and time is, as Ellison knows it, a relentless unreality, unreal in that the Negro as a group is loved, hated, persecuted.'

feared, and envied, while as an individual he is unfulfilled, unheard, unseen—to all intents and purposes invisible.

Jonathan Baumbach, "Nightmare of a Native Son: Invisible Man, by Ralph Ellison" (Donald B. Gibson (ed.), *Five Black Writers* p. 74.) (引用文のイタリックは筆者)

(2) Cf. Robert Bone, "Ralph Ellison and the Uses of Imagination" (Herbert Hill (ed.), *Anger, and Beyond: The Negro Writer in The United States* pp. 87—89.)

(3) Ralph Ellison, *Shadow and Act* "Introduction" p. xiii.

(4) Cf. *Ibidem* "The Charlie Christian Story" p. 234.

(5) *Ibidem* "Hidden Name and Complex Fate" p. 152.

(6) Cf. *Ibidem* "Hidden Name and Complex Fate" p. 166.

(7) この問題に関しては、拙論の論点とはやや違った角度から、大橋健三郎氏が極めて示唆に富む文章を発表しておられる。大橋健三郎『名前』についで——ある比較文学(文化)論的幻想——(『不死鳥』No. 35) 参照。

(8) Cf. Robert Bone, *The Negro Novel in America* p. 201.

(9) この短篇は、ライトの死後に出版された短篇集『八人の男たち』(Eight Men) (一九六一年) に収録されている。

- (10) 『ドストエフスキー I』(新潮世界文学10)につけられた江川卓氏の《解説》による。
- (11) 同書、一七五頁。
- (12) Cf. Walt Whitman, *Leaves of Grass* (A Mentor Book) p. 31.
- (13) W. E. B. DuBois, *The Souls of Black Folk* (*Three Negro Classics* pp. 214—215.)
- (14) 以下の文論は、Jonathan Baumbauch, "Nightmare of a Native Son: *Invisible Man*, by Ralph Ellison" に負うところが多い。
- (15) アメリカ合衆国憲法、第一条、第二節、三項は、アメリカ黒人は五人で三人と数えるべきことを規定している。
- (16) 「アンクル・トム」は、周知のようにストウ夫人の『アンクル・トムの小屋』(Harriet Elizabeth Stowe, *Uncle Tom's Cabin*) (一八五二年)の主人公の名であるが、
- 「白人におもねる黒人」の蔑称となった。
- (17) 一八九六年、最高裁判所がルイジアナ州の列車内の黒人隔離に関して下した判決。
- (18) Cf. Ralph Ellison, *Invisible Man* (Penguin Modern Classics) p. 462.
- (19) *Ibidem* p. 464.
- (20) *Ibidem* p. 468.
- (21) この問題については、すでに、アメリカ黒人の「私生児性」に焦点を合わせて、いささか論じておいた。「ジェームズ・ボールドウィンにおける『黒人問題』」(『一橋論叢』昭和四十三年一月号)、「ジェームズ・ボールドウィンにおける『父』の探究——『山に登りて告げよ』試論——」(『一橋論叢』昭和四十四年七月号) 参照。

(一橋大学教授)